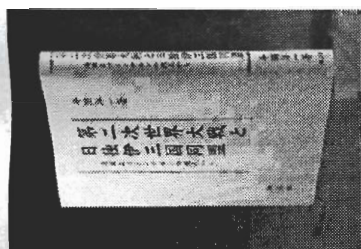


第二次世界大戦と日独伊三国同盟

日本が日支事変から抜け出せなかったのは、中国の蔣介石政権を、裏から米国のルーズベルト大統領とソ連のスターリン書記長が助けていたからで、日本はそれを承知していた。しかし、米国の戦争だけは避けたいとの意図は一致していた。だが、陸軍、海軍、外務省の三者が対処方法で分裂し、三者三様の対立となり、のろわれた外交となってしまった。

そのスキを、独が外務省を通じて日本外交を反英、反ソに仕向け、日独伊三国同盟に誘った。

米大統領は、日本の太平洋への



進出を抑え、また英仏を助けるため、宣戦布告をしない戦争を既に開始していた。「我々は宣戦はしないが、民主主義国家の大兵器廠とならばならない」と日本に石油をはじめ戦略物資の輸出を封じた。中国とソ連に対しては、大量の兵器を送り続けた。

対米、対ソへの融和の方途を考えた上での三国同盟であったが、独が、独ソ戦を開始したことで、日本外交はさらに混迷を重ねた。

トランプ大統領の独断と傲慢が、逆に日本を危機に陥れた。

日本外交はひたすら平和を求めながら、対処方法で、国家として一致したスピードある外交ができなかったことが禍根を遺した。結果、軍部の主張が目立つ中であつ

平和を望むも混迷重ねた外交

平間洋一著

ひらま・ようち 昭和8年、神奈川県生まれ。防衛大学校卒。護衛艦ちとせ艦長などを経て海将補で退官。著書に『第一次世界大戦と日本海軍』など。(錦正社・6090円)

て、昭和天皇の事件の節目ごとの、国際信義に悖ることなきや、との御心意のみが際立っている。

長く政治の世界に生きた私は、日支事変、三国同盟、第二次世界大戦への概要は承知していたが、平間・元防衛大学校教授の本書を読んで、事変当事者のあらゆる発言を引用しつつ、的確な判断を下してゆく、右の如き筋書きになるほどぞろだったのか、と納得のゆくことばかり。さらにかつて著者が身をおいた、コミンテルンの内部からみた、戦争への謀略。また、戦後マッカーサー元帥の下に集まった、占領軍の若き革新の士が、戦後の日本を容共へと仕上げた点などは、耳新しい。

本書の、どの頁を開いても、昭和史の、生きた血が吹き出る姿だとの思いで読んだ。

元民社党委員長

塚本三郎